

心 の 悪

- エレミヤ書 4 章の釈義的研究 -

大 串 肇

エレミヤ書 4 章以下には所謂「北からの災い」と呼ばれる一連の審判の言葉が記されている。主にユダとエルサレムに対して、自然災害や戦争等様々な表象を通じて災いが告げられる。「敵」の具体的な名前は、1 章の幻と同様、未だ明かされていない。従って、4 章全体の使信は預言活動の初期に属すると一般に考えられている。神の民を神自身が滅ぼすこと。つまり、民が将来直面することになる恐るべき事柄とは、厳密な意味で、単なる「災い」ではなく、神の「審判」である。

この大きな文脈の中で注目すべきは、エレミヤ書 4 章には人間論用語「心」(= לב) が様々な用法と共に出てきていることである (4,9,18,19 節)。本論の目的はこの鍵の言葉に注目しつつ、その意味領域や機能を解明すると共に、釈義的分析を通じて 4 章の宣教の意図を明らかにすることにある。⁽¹⁾

先ず、様式的かつ内容的に、4 章は 1 - 4 節、5 - 8 節、9 - 10 節、11 - 18 節、19 - 22 節、23 - 26 節、27 - 31 節の小単元に区切ることが出来る。

訳

- 1 節 ヤハウェは言う、
「もしあなたがわたしに立ち帰るならば、立ち帰りなさい。
もしあなたがあなたの忌むべき物をわたしの前から取り去れば、
あなたはさ迷うことはない。
- 2 節 あなたが『ヤハウェは生きている』と、
真実と正義と公平をもって誓うならば、

諸国民はヤハウェにおいて祝福を受け、
ヤハウェをほめたたえる。」

3 節 ユダとエルサレムの人々にヤハウェはこう語る。

「あなたがたの新田を耕しなさい。

茨に種を蒔いてはいけない。

4 節 ユダの人々とエルサレムの住民たちよ。

ヤハウェのために あなたがたは割礼せよ。

あなたがたの心の包皮を取り去りなさい、

さもなければ、わたしの怒りが炎のように出て、燃え上がる。

あなたがたの悪い行いの故に、誰も消すことが出来ない。」

5 節 ユダに伝え、エルサレムに語り、こう告げなさい。

「ラッパを吹け、その地に。大声で叫びなさい」と。

更にこう語りなさい。

「集まりなさい。堅固な町々に入りなさい。

6 節 シオンに向けて旗を挙げなさい。

逃げて、立ち止まってはならない」と。

まさに、わたしが北からの災いを、大いなる滅亡をもたらす。

7 節 一匹の獅子が茂みから上って来た。諸国民を滅ぼす者が出発した。

彼は自分の土地を出た。あなたの国を攻め、荒廃させるために。

あなたの町々は滅ぼされ、誰も住まなくなる。

8 節 それゆえに、粗布をまといなさい。嘆き、泣き叫びなさい。

ヤハウェの怒りがわたしたちから去らない」と。

9 節 その日になれば、とヤハウェは語る。

王、指導者たちは勇気を失い、祭司たちは恐れ、

預言者たちは大きな衝撃を受ける。

10 節 そして彼らは言う、

「ああ、主なるヤハウェよ。あなたは、確かに、この民と

エルサレムを欺いた。『平和があなたたちに訪れる』と語ったが、剣

が喉もとに突きつけられている」と。

11 節 その時、この民とエルサレムとにこう告げる。

- 「熱風が、荒野からわたしの民の娘に向かって吹きつける。
それは、清めるためでも、振るい分けるためでもない。
- 12 節 見よ。更に激しい風がわたしのところにやって来る。
今や、わたしは彼らに裁きを下す。
- 13 節 見よ。それは雷雲のように上って来る。そしてその戦車は嵐のように、
その軍馬は、驚よりも速い。
ああ、災いだ。
というのは、わたしたちは滅ぼし尽くされるからです」と。
- 14 節 エルサレムよ、あなたの心の悪を洗いなさい。
あなたが救われるために。
いつまで、あなたの内に悪い思いをとどめておくのか。
- 15 節 ダンから叫び声があがっている。エフライムの山から災いが聞こえる。
- 16 節 諸国民に告げなさい。見よ。エルサレムに知らせなさい。
「遠い地から侵略者たちが攻め上り、ユダの町に向かって声をあげ、
- 17 節 畑の見張り人たちのように彼らを四方から囲む。
というのは、ユダがわたしに背いたからだ」とヤハウェは語る。
- 18 節 あなたの道と諸々の行いがこれらのことをもたらす。
これがあなたの悪であり、まことに苦く、あなたの心にまで達する。
- 19 節 わたしのはらわたよ、わたしのはらわたよ。
わたしはのた打ち回る。
わたしの心臓の壁よ、わたしの心臓はわたしの中で暴れる。
なぜならば、わたしは、ラッパの音、鬨の合図を聞いたから。
- 20 節 「破壊につぐ破壊」と人々が叫ぶ。
というのは、全地が荒らされたから。
突然、わたしの天幕は破壊された。一瞬にして、わたしの幕が。
- 21 節 いつまで、わたしは旗を見、ラッパの音を聞くのか。
- 22 節 まことに、わたしの民は無知だ。彼らはわたしを知らない。
彼らは、愚かな子で、分別がない。彼らは悪を行うことにさとく、
善を行うことを知らない。
- 23 節 わたしは見た。見よ、大地は混沌とし、天には光がなかった。
- 24 節 わたしは見た。見よ、山は揺れ動いた。丘はすべて振るえた。

- 25 節 わたしは見た。見よ、人は誰もいなくなった。
空の鳥はすべて飛び去った。
- 26 節 わたしは見た。見よ、実り豊かな大地は荒れ果てた。
町々はすべてヤハウエの前で、
彼の燃える怒りによって打ち砕かれた。
- 27 節 それゆえ、ヤハウエはこう語る。
全地は荒廃する。わたしが、全地を滅ぼす。
- 28 節 それゆえ、大地は嘆き、上の天は暗黒に包まれる。
わたしは自分の思いを告げた。わたしは後悔しない。
決してこれを覆さない。」
- 29 節 騎兵や弓の射手の叫びで、都から人々は逃げ去り、茂みに隠れ、
岩に登った。
都は捨てられ、ひとりもそこに住む者はいなくなった。
- 30 節 しかし、滅ぼされる者よ、あなたは何をしているのか。
赤色の衣をまとい、金の飾りをつけ、目の縁をを塗り、無駄な
装いで着飾っている。
愛人たちはあなたを捨て、あなたの命を狙う。
- 31 節 初めて子供を産む時の苦しみの声。
手を差し伸べてあえぐシオンの娘の声がわたしには聞こえる。
ああ、災いだ。わたしの命は殺す者の前に晒されている。

1 . 文学的批判的分析 Literarkritische Analyse

a) 1 - 4 節

1 - 4 節は次のような種々の理由で文学的統一性を形成していない。⁽²⁾
この単元が 2 つの小単元から構成されていることは明白である。すなわち、1 - 2 節は、条件文で形成されている。他方、3 - 4 節は、命令文として描かれている。主題的には最初の単元 1 - 2 節は、同じ「悔い改め」(שוב) を扱う前章のまとまりに従属しているのが自然である(エレ3, 1 以下)。一方、3 - 4 節には、所謂「使者の定式」Botenformel、新しい聞き手の列挙⁽³⁾、2 人称複数への語りの移行が見られ、3 - 4 節の

文学的独立性を特徴づける。⁽⁴⁾ また、3節の接続詞**וְ**は、この独立した後半部分と前半部分(1・2節)とを形式的に連結する役割を果たし、編集上の連結と見ることが妥当である。ただ、前述の3章の主題である「悔い改め」は、新田の開墾と心の割礼という全く新しい表象によって継承され、かつ内容的に拡大補充されている。3・4節の單元における信仰の刷新の問題は、「心」(**לֵב**)という鍵の言葉によって移行され、続く「災いの告知」Unheilsankündigung(5・31節)に接続する。⁽⁵⁾

以上から、3・4節は3章1節・4章2節の伝承群と4章5節以下の「北からの災い」に関する審判の語りとの橋渡しとして、恐らく編集付加されたと考えられる。用語上の理由から、3・4節は申命記史家的編集と見なされる。⁽⁶⁾

b) 5・8節

平行法による命令法、ユダとエルサレムに審判を告知する要求によって新しい導入部分が形成され、ここで別の小單元が開始する。5・8節の單元は導入句の後直ぐに一連の、民全体に向けた警鐘、避難、叫ぶことの要求が続いている(5a - 6a)。これらは6節bに理由が添えられている。「というのは、わたし(=ヤハウェ)が災いと滅亡をもたらすからだ」と。⁽⁷⁾獅子と民を殺戮する者の描写⁽⁸⁾によって、敵の襲撃、戦争の勃発が暗示される(7節)。敵は間近に迫っており、民全体に嘆きが求められる(8節；vgl. エレ6,26；ミカ1,8)。そして神の怒りがすぐに去るという誤った期待が完全に崩される。このようにして敵の進軍の最終目標が領土全体を滅ぼすことにあることが宣告される(5節、7節)。⁽⁹⁾

c) 9・10節

次に、民の指導者たちにも審判が告げられる(9・10節)。審判は民全体に及ぶ。つまり例外はないのである。9節「その日になれば…起こる」という表現は、ここで新しい小單元が始まることを指示している。だが、内容的には前の小單元における「災いの告知」Unheilsankündigungの続きである。もっともここでは民の代表者として指導者たちにその審判の

使信は向けられている（vgl. エレ 2, 8）。

10節の散文体の文章は見逃せない。というのは、明らかにこの文節は敵の来襲という主題ではなく、預言者たちの語った救済預言の成就の問題を取り上げており、文脈を壊しているからである。

この預言者たちに対する審判預言に関しては、所謂「偽預言者問題」がこの10節に後から挿入されたと考えられる。つまり、審判が及んだのはヤハウェが悪いのではなく、そもそも救済を語っていた預言者たちの預言が偽りだったことがここで明白にされている。ここには本文上の問題があるが、結論として10節を9節の預言者たちの発言として続け、偽預言者たちの嘆きと理解すべきである。⁽¹⁰⁾ また、10節は詩文体を崩す。しかも救済預言が偽りであったという、審判が既に起こっている後代の解釈を反映している（vgl. エレ 23, 17）。以上から、10節を後代の付加と考える。⁽¹¹⁾

d) 11 - 18 節

11節から、新しい審判描写が始まる。⁽¹²⁾ 11節 a「その時」は、9節「その日」に対応する。「この民とエルサレム」（10節 a）がここでも繰り返されている。こうして11節 a は、前の小単位とこの小単位を滑らかに連結する機能を果たしている後代の編集句と考えられる。⁽¹³⁾

最初の11 - 13節は、描写の転換や話者の交代を伴いつつもひと続きの審判描写である。その中央に災いの宣告がある（12節）。13節の当惑した民の悲鳴で8節と同様に11節からの審判描写を結んでいるように思える。⁽¹⁴⁾

次に、4節以下は、敵の迫りつつある襲撃を描いている。この第2の審判描写も内容的には前の続きである。

この観点で、14節 a の内的浄化の訴えは注目すべきである。11節以下、15節以下の前後関係の中、14節 a は明らかに孤立しているように思えるからである。果たしてこの文節は本来の審判宣教の文脈を壊しているのだろうか。⁽¹⁵⁾

先ず、15節は14節を飛び越して13節に直接結びついてはいない。む

しろ、15節は用語的には14節bと密接に結合している。「悪い考え」を言い表す14節bのאִי is, 15節aで再び用いられている。そこでは「災い」をその語は意味する。この用語の重複によって、民の及ぶことになる「災い」と、その災いの原因となる民の「悪」とを関連付けているのである。また、その悪に染まった「心」は、14節ではאִיと同義語のעַרְוָהと結び付いて、同じように民の内的罪を表し、それゆえに民全体に及ぶことになる神の審判を前提に語られている。また、「心」は再び18節でも繰り返して用いられている。

以上から、15・17節の災いの報知は14節と18節によって枠付けられていることが明白である。もっとも、14・18節は内容的には11・13節を前提にしている。だが、問題として未だ残されているのは、14節がこのような形式上内容上の連関に果たして適合しているのか、否かの問いである。

14節の様式史上の特殊性とは、「勧告」Mahnung(14節a)と「いつまで」⁽¹⁶⁾という問いで始まる「嘆き」Klage(14節b)の並置にある。だが、勧告と嘆きの「混合類型」は、- 70人訳聖書(LXX)に従えば⁽¹⁷⁾ - ホセア書8章5節に既に出てきている。

サマリヤよ、あなたの子牛を捨てなさい。⁽¹⁸⁾

わたしの怒りが彼らに向かって燃え上がる。

いつまで彼らは清くなり得ないのか。

ホセア書では、「審判の宣告」Gerichtsansage(ホセ8,1a - 3.6b.10.13b.14b)と「告発」Anklage(ホセ8,2.18)の文脈の中で、5節aの勧告は、「子牛を取り除くべきだった」が、既にそれは遅すぎた、こうして結果として民の罪こそ神の審判を招いた原因であったことを証示する機能を有し、嘆きと相俟って、審判告知全体を精鋭化しているのである。⁽¹⁹⁾ エレミヤはこの先達者のユニークで、ラディカルな審判の言葉

を彼の宣教の中に用いたと考えられる。だが、ただの受け売りではなかった。預言者自身がここで嘆いている意味がある。つまり、もはや心を浄化することの出来ない民の罪と来るべき審判の不可避性を彼の実存全体で受けとめている。彼自身、滅ぶべき民の一員だったからである。

14節には、前半の命令の要求と共に、要求される行為を動機付ける目的文が後半に併記されている。このように14節aの勧告は本来教育的な機能を有していたはずである。⁽²⁰⁾ところが、このような教育的用法をエレミヤは自由に自分の宣教の中に受容し、全く異なった意図を付与した。それは、もはや教育や勧告では救済し難い民の罪を暴露し、来るべき審判を理由付けることである。外的な汚れは水で洗浄できる。しかし、民の心の悪は水で洗浄できないように、救済の見込みは既に奪われているのである。

同じような事例として、かつて預言者アモスあるいはその弟子集団に帰する「勧告の言葉」Mahnwortが挙げられる。すなわち、「善を求めなさい、悪事ではなく。あなたがたが生き延びるためである。そうすれば、(万軍の神)ヤハウェはあなたがたが語っているように、あなたがたと共にいる(アモ5,14)。この生への積極的な要求は、果たして字義通り救済の可能性を民に提供していると考えるべきだろうか。

否、救済が可能なのは、「求めること」が無条件に果たされる場合にのみ限定されており、結果としてその救済の約束はごくわずかの例外にだけ妥当するに留まっている。⁽²¹⁾むしろ、その勧告の言葉は大多数が滅びることを前提にしているのではないか。もしそうであるならば、一見明るい預言者の発言も実は預言者的審判宣教のラディカルさを確証する機能を果たしていると言えるのである。

e) 19 - 22 節

19 - 21 節にはエレミヤの「嘆き」Klage が記されている。この単元は先行する単元から鍵の言葉である「心」(= 𐤇𐤍)を採用しているが、ここではエレミヤ自身の心として用いられている。

19節bは19節aの嘆きの「理由付け」Begründungとなっている。すなわち、その嘆きは直接的には角笛の音や関の声によって動機付けられている。それらは北からの敵の来襲を指し示す。その頂点は全領土の荒廃である。エレミヤが嘆くのは、預言者自身そこに住んでいる領土である（20節;vgl.7節）。「いつまで」という問いによって導入された21節の嘆きは（vgl.14節b）、19 - 21節のエレミヤの嘆きを結ぶ。この19 - 21節の預言者の嘆きに直接続くのは、接続詞**וְ**によって導入されたヤハウエの一人称の語り、22節である。ここでヤハウエは民の愚かさやヤハウエ認識の欠如を嘆く。⁽²²⁾前にエレミヤが嘆いていた審判は、今やこのヤハウエの嘆きの中によって理由付けられる。

f) 23 - 26 節

19節以下は「北からの災い」を終始一貫して主題とする。が、その審判描写には実に多様な文学様式が用いられている。文学批判上問題となるのは、23節以下である。とりわけ、23 - 26節の幻報告は、「わたしは見た。見よ」という同じ定式で叙述されている。ただ形式のみならず、内容的にも以下の点で前後の文脈からは際立っている。つまり、前段までは、差し迫った敵の来襲、ユダの全地の滅亡が主題であった。

ところが、ここでは、滅亡の範囲が「天と地」すなわち、全宇宙の破局まで拡大されている。23節の「混沌」や「空に飛ぶもの」の表象は、テクストの後代の由来を推定させる（vgl. 創 1,2）。⁽²³⁾従って、23 - 26節は後代の付加と考えられる。⁽²⁴⁾

g) 27 - 31 節

最後の小単位27 - 31節は、再び敵の来襲の主題に戻る。これは、「使者の定式」Botenformelを伴いつつ、全ての地が荒廃するという「審判の宣告」Gerichtsansageである。⁽²⁵⁾その中で、とりわけ、エルサレムの滅亡が克明に描かれている（29 - 31節）。8節、13節と同様に、ここでは首都エルサレムの住民たちの嘆き、叫びが引用されている。

2 . 神学的意図 Theologische Intentionen

2 - 1 エレミヤの審判宣教（後代の付加 10 節，23 - 26 節を除く）

a) 5 - 8 節

「災いの告知」における最初の単元が強調するのは、来るべき災いをもたらす主題がヤハウェ自身であり、これがヤハウェの御業である点である。すなわち、他ならぬヤハウェ自ら、「災い」を(6 節b;vgl.エレ22, 7), 民全体に対する「大いなる滅亡」をもたらし、「破壊者」(7 節; vgl.エレ22,7)を派遣し、領土を「恐怖にする」(7 節; vgl.エレ18,16)。8 節は、神の怒りから民が免れることが出来るという誤った希望(vgl.エレ2,35)を打ち砕き、審判を告知する。⁽²⁶⁾

b) 9 節

預言者は民の指導者に対して審判を告知する。彼らはやがて途方にくれ、勇気もなくなる、と。ここでは5 - 8 節のようにその審判の根拠は挙げられてはいない。ただ、指導者たちにも災いは及び、そうすることによって、この審判の範囲には例外がないことが明示される。

c) 11 - 18 節

エレミヤは、熱風、雷雲、戦車、軍馬等、実に様々な表象によって、告知された神の審判の性急さ、緊迫さ、激しさを強調する。また、6 節bと同様に、審判をもたらす主体がヤハウェであることをエレミヤは表明する(12 節)。

エレミヤ自身の嘆きと結合して(14 節b), 14 節aの「勧告の言葉」は、心の悪を告発する、民の「罪の立証」Schuldaufweisとしての役割を果たす(vgl.18 節)⁽²⁷⁾ 心の「悪」と共に、17 節で、エレミヤは心の頑なさを指摘し、15 - 17 節 a で告知された審判を基礎付ける。

d) 19 - 22 節

預言者は自分の困惑を躊躇なく表明する。というのは、彼の嘆きは来るべき将来の脅威、すなわち差し迫った神の審判によって動機付けられ

るからである。審判はエレミヤの嘆きにおいて既に現在となっている。このようにして彼自身の嘆きは預言者の未来確信を表明しているのであり (vgl. エレ 23,9;8,18)⁽²⁸⁾ , 預言者的宣教の一部となっている。

e) 27 - 31 節

預言者は先ずはエルサレムに対して警告への叫びをはじめに (5 節), 敵の出撃 (7 節), 荒野の進軍を経て (11 節), 北の都市と山岳地帯への侵入 (16 節), やがてユダの町々の攻略 (17 節), そして完全なる首都の陥落 (29 - 31 節) へと敵の襲撃と侵略を劇的に描く。但し, 27 - 28 節では, 領土の荒廃に関する災いの使信の主題を再び採用し (7 節, 20 節), ヤハウェによる審判の不可避性を預言者は強調する。

2 - 2 申命記史家的編集の意図 (3 - 4 節)

前述のように 4 章 3 - 4 節は申命記史家的編集に帰する。これらの数節が捕囚時代の編集者に帰するとすると, 内的変革を要求する勧告はどのような意図があるのだろうか。編集者にとってエレミヤが語った神の審判は紀元前 587 年のバビロン捕囚とエルサレム陥落において実現していることが前提である。

従って, 5 節以下の「北からの災い」に審判の告知に鑑み, 3 - 4 節はその審判を招来させた民の「罪の立証」Schuldaufweis の機能を有している。すなわち, 民の内的浄化は心の割礼によってはなし得ない, そして神の審判は不可避となったことが明らかにされたのである。

編集はその勧告の言葉を預言者の口を通して語らしめる。⁽²⁹⁾ だが, 強調したいことは, ヤハウェ預言者の正当性と共にその預言者の労苦が無駄になった歴史的結果である。「確かに預言者は警告した!」。しかし民は「聞き従わなかった!」。これが神の民の破局の原因だったのである。

3．4章における「心」(לֵב)の用法

3 - 1 心の割礼の要求

ヤハウエのために あなたがたは割礼せよ。
あなたがたの心の包皮を取り去りなさい、
ユダの人々とエルサレムの住民たちよ。
さもなければ、わたしの怒りが炎のように出て、燃え上がる。
あなたがたの悪い行いの故に、誰も消すことが出来ない。(エレ4,4)

3 - 1 - 1 「心の包皮」

「心の包皮」という表現は申命記10章16節及びエレミヤ書4章4節に例証がある。⁽³⁰⁾ この割礼と結び付いた特殊な表現の意味するところはいったい何か。まずは、申命記の例証はエレミヤ書の手本とも思えるような勧告である。

あなたがたの心の包皮を切り取りなさい。
あなたがたはいつまでも強情であってはならない。

並行する後半の節では、民の強情さが問題にされている。つまり、ヤハウエに対する「不従順と悔い改めの欠如した態度」³¹⁾である。そこで、心の包皮を除去することによって、ヤハウエに対する完全な意志の傾注が可能となるはずである。⁽³²⁾

3 - 1 - 2 エレミヤ4章4節における「心」(=לֵב)の意味 (dtr)

ここでは民の内的変革だけではなく、悪の行為から根本的に離れることが要求されている。つまり、人間そのものの変革が要求されている。⁽³³⁾だが、5節以下の、預言者の「災いの告知」Unheilsankündigungに鑑み、心の割礼の要求はもはや現実的ではなくなっている。従って、申命記史家的

編集は、預言者の審判宣教や罪に対する認識を前提にしつつ、心の刷新は唯一、神の賜物としてのみ可能であることと理解する。この神学的見解は、エレミヤ書中の申命記史家的救済の約束の中に反映する（vgl. エレ 24, 7 ; 31, 33 ; 32, 39 ; 全て dtr ）。

3 - 2 指導者たちの「心」

王、指導者たちは勇氣（**נִחַם**）を失い、祭司たちは恐れ、
預言者たちは大きな衝撃を受ける。（9a b）

預言者は民の指導者たちに切迫した災いの到来を告知する。ここで**נִחַם**は、人間の「勇氣」を意味する。⁽³⁴⁾ このような「勇氣」の喪失に関する表現形式は、その他ではイザヤ書 46 章 12 節（LXX）に見られる。⁽³⁵⁾

こうして災いに直面する指導者たちの当惑と勇氣の喪失が描かれている。

3 - 3 「心の悪」(a)

エルサレムよ、あなたの心の悪を洗いなさい、
あなたが救われるために。
いつまで、あなたの内に悪い思いをとどめておくのか。（14 節）

3 - 3 - 1 「心」と「悪」

「心」と「悪」(あるいは形容詞「悪い」)が結び付いた例証は少なくない。詩編 28 編 3 節で描かれているのは、隣人に親しげに挨拶しながら、その心の中では憎しみを抱いている祈禱者の敵である。

罪人たちと悪事を働く者たちと一緒にわたしをつまみ出さないで下さい。
彼らは隣人たちと親しげに語りますが、心の中では悪を抱いています。⁽³⁶⁾

また、古い箴言は次のように語る。

悪事を企む者の心には欺きがある。(箴 12,20a)⁽³⁷⁾

そしてこれらの発言の極みとして、人間の心に浮かぶあらゆる思考が常に悪意に満ちていると、ヤハウィストは断言する(創 6,5;8,21)。⁽³⁸⁾

エレミヤ書 4 章 14 節 a では、14 節 b にある、癒しがたい「思い」や「企て」⁽³⁹⁾が潜むのも「心」(= קרב) である。⁽⁴⁰⁾ここでは平行概念として קרב と לוּב が並んで用いられる。こうして内在化した悪の深刻さ、そしてその民の救い難さが一層強調されているのである。⁽⁴¹⁾

こうしてエレミヤがここで問題としているのは、計画や熟考における人間の悪意に満ちた意志である。そして同時に 15・17 節 b においてエレミヤは民の「強情」を告発する。⁽⁴²⁾こうして神に対する不従順な意志(17 節)と悪い行為(18 節 a)によって、民に及ぶ神の審判を預言者は理由付けているのである。

このように「心」という人間論的概念に関して、単なる人間の内的な意志だけでなく、行為も共に言及される点は注目すべきである。つまり、この用法は人間全体として悪と結び付き、神の審判の下にある、救い難い罪の姿を描くために貢献しているのである。

3 - 3 - 2 罪の浄化

エレミヤ書 4 章 14 節 a において、民の罪の浄化との連関で「洗淨」という表象が転用されて用いられている。同じような用例はエレミヤ書 2 章 22 節にも見られる。ここでは民全体に向けられた告発の中で、内在化した民の罪が指摘されている。⁽⁴³⁾

たとえあなたが灰汁で身を清め、多くの石鹼を用いても、
あなたの罪は、わたしの目の前では染みついたまま残ると
ヤハウエは語る。

このエレミヤによる告発の言葉，民の罪を洗淨することがもはや不可能であると言う告発の言葉をエレミヤ4章14節aは前提にしている。つまり，人はもはや救われない。民の心を悪から洗淨し，神への完全なる帰依を創り出すことはもはや人間の出来る事柄ではなくなっているのである（vgl.エレ17,1）。

3 - 4 「心の悪」(b)

あなたの道と諸々の行いがこれらのことをもたらす。

これがあなたの悪であり，まことに苦く，あなたの心にまで達する。

（18 節）

18節bは文法的には難解な文節である。⁽⁴⁴⁾ それにもかかわらず，ここで言われているのは，大まかに言って，心の悪こそが，差し迫った災いの根本原因であるということである。18節aのゆえに，ここで問題とされている悪とは，倫理的な問題と考えられる。⁽⁴⁵⁾ いずれにせよ，この場合，意志と行為とは切り離して考えられてはいない。

3 - 5 エレミヤの心

わたしのはらわたよ，わたしのはらわたよ。

わたしはのた打ち回る。⁽⁴⁶⁾

わたしの心臓の壁よ，わたしの心臓はわたしの中で暴れる。

なぜならば，わたしは，ラッパの音，闘いの合図を聞いたから。（19 節）

預言者は「心」の平行概念である「はらわた」（= מַעֵה）をここで用いる。⁽⁴⁷⁾ この人間論用語は感情の座⁽⁴⁸⁾ として，人間の心の内部で起こる驚きや興奮を表現する。⁽⁴⁹⁾ 特に，動詞מַעַהと結合して，愛情，悲哀，憐れみ，興奮等

の感情表現となる。

それゆえに、わたしのはらわたは(= מַעֵה 複数・合成形・人称語尾)

モアブのゆえに煮えたぎる(豎琴のように)

わたしの心(= לֵב)はキル・ヘレスのゆえに。(イザ 16,11)⁽⁵⁰⁾

このようにして人間が直面する困惑した思いが、様々な人間論用語を用いて言い表されている。⁽⁵¹⁾

しかし、こうして様々な感情を備えたのが人間であるという旧約聖書の人間像がここに反映している。特筆すべきは、19節・21節の預言者の嘆きである。

なぜ、彼は嘆くのか。直接の原因は、戦争の勃発、ラッパの音とや闕の声による(19 節 b)。だが、ユダの滅亡はエレミヤにとって他人事ではなかった。エレミヤは、他ならぬ民の一員として、一人の人間として嘆いている。滅ぶべき民は、彼の同胞であり、神の民であった。その歴史が今や終わるのだ。

この嘆きは、たとえ個人的ではあっても、預言者としての使命、彼が語らなければならなかった神の使信、審判預言と不可分である。つまり、この民にとって未だ将来の出来事が、預言者自身の内では既に確固たる現在となっている。つまり、不安に怯え苦悩する預言者自身がその宣教の中で神の審判の徴とされたのである。

4 . 要約 Zusammenfassung

エレミヤは人間論用語「心」(= לֵב)を比較的初期の審判宣教の中に取り入れた(エレ 4 , 5 以下)。この「心」に関する発言は、とりわけ民を代表とする指導者層に対する「審判の宣告」Gerichtsansage(9 節)、そして民全体に見られる「罪の立証」Schuldaufweis(14 節 , 18 節)の中に伝承され

ている。

注目すべきは、心の浄化を要求する預言者の勧告の言葉でさえ、最後通牒というよりは、もはや差し迫る審判の原因となる民の罪の所在を暴露するために役立つに過ぎない。すなわち、その罪の根本こそが、心の中にある不浄なる悪であり(14節a, 18節b)、強情(17節b)、更には民の愚かさであり、ヤハウェを知ることの欠如(22節a)なのである。また、心の悪と並んで、悪意に満ちた民の行為も断罪されている(18節a, 22節b)。こうして審判の下にある人間全体が把握されている。

来るべき審判は不可避であることが預言者の宣教のよって明らかになった。だが、それだけではない。預言者自身の嘆きが「心」(= לב)のみならず、様々な平行概念、人間論用語によって生き生きと描写されている(19節)。この嘆きの中で、預言者の未来確信と共に審判の不可避性が鮮明に描き出されている。

こうしてエレミヤ書4章5節以下の「北からの災い」の告知において、預言者による「心」に関する発言は、その意図の多様性にもかかわらず、民の内在化した罪を暴き、民の絶滅を告知する預言者的宣教の一部となっている。

他方、申命記史家の編集は、以上の4章5節以下に沈殿した民の罪に関する預言者の認識や人間理解に基づいている。「心の包皮」を取り去ることによってヤハウェに完全に立ち帰ることが救済の根拠である(エレ4,4)。だが、破局を経験した捕囚期の編集にとって、完全なる神への帰依は、いかなる神の助力なくして人間的努力のみによっては不可能であることが前提であった。そこで3・4節の「警告の言葉」Warnwortは、結局面587年の破局をもたらした民の「罪の立証」Schuldaufweisとして機能する。

注

- (1) 4章に関する釈義に関して既に公にしている論文はある。が、最新の研究成果を踏まえつつ、今回改めて釈義し直し書き下ろした。Vgl. 拙論「エレミヤ書2 - 6章における人間論用語 $l\bar{e}b(a\bar{b})$ の宣教史的研究」(所収『神学』47号, 173 - 202, 教文館, 1985年)同「北からの災い(一)」(所収『形成』No 350.351, 2000年, 11 - 12)。
以下本論では、エレミヤ書注解書に関して、著者名及びページ数のみ(複数巻ある場合は略数字にて巻数を併記した)、他の注解書並びに辞書辞典は、著者名とページのみを記し、書名及び巻数は略し出版年、出版地等は省略した。著作論文も著者名とページ数のみを記し、論文名は略した。また、聖書本文は原則として私訳した。本文批評上の問題は適宜本文末中に記載した。聖書箇所略記号は、新共同訳聖書に準じた。
- (2) Vgl. W. Thiel, Redaktion I, 93f; G. Warmuth, Mahnwort, 99.
- (3) B. Duham(46) はエレミヤがユダに直接語りかけたものでないという理由でこの聴衆の名前を削除することが、必ずしも削除する本文上の必要性はない。
- (4) Vgl. W. Thiel, Redaktion I, 94; R. P. Carroll 157; 1 f と 3 f の文体的相違等について; vgl. J. R. Lundbom, Jeremiah I, 328f.
- (5) Vgl. **יְהוֹנָדָה** (1節 b, 4節 a)。
- (6) 4a節に見られる「ユダの人々とエルサレムの住民」という宛名は専ら申命記史家的編集箇所例証されている(エレ 11, 2; 18, 11; 32, 32; 35, 13; vgl. 17, 25; 更に、王下 23, 2 = 代下 34, 30; ダニ 9, 7)。「住民」の欠けた形も(3節 a), 恐らく史家の用法と考えられる。4節 b とエレ 21, 12b とが字義通り一致することにより、4節 b の真正性が推測される。だが、この文節の他の要素は史家の編集箇所にも出てくる(「悪い行為」エレ 23, 2, 22; 25, 5; 26, 3; 44, 22; 更に申 28, 20; エレ 26, 3; 44, 3)。以上から、4節 b はエレ 21, 12b から史家的編集が採用した可能性が高い。心の包皮を除去するようという訴えは申 10, 16a にも見られる(vgl. 申 30, 6; これに関して類似した表現がある。Vgl. 「無割礼の心」エレ 9, 25; エゼ 44, 7, 9; レビ 26, 41。論争されているのは、3節 a **יְהוֹנָדָה** をめぐる判断である。確かに、新田の開墾の要求はホセ 10, 12 に対応する。それゆえに、このエレミヤ書の文節も預言者自身の発言に遡る可能性があると考えられる。だが、この文節はあまりにも独立したひとつの格言のようで、果たして預言者自身に帰するか否か確実なことは言えない。仮にこれが預言者の真正な預言としても、どのような連関でその言葉が語られていたのか定かではない。従って、この箇所の真正性は疑わしい。尚、研究史上、3 - 4節の現在の形が史家的編集によるものであることは、W. Thiel の詳細な分析によって既にほぼ確証されている(W. Thiel, Redaktion I, 93-97; vgl. G. Warmuth, Mahnwort, bes. 103; R. Albertz, ZAW 94, 27, T. Odashima, Untersuchungen, 180, 240; R. P. Carroll, 157-159; N. Kilpp, Aufbau, 171 Anm. 160; G. Wanke, Jeremia I, 57f)。
- (7) B. Duham(48) はこの文節を「というのは、災いが北から来るからだ、それは大きな破壊だ」と訳す。話者はヤハウェではないからだと B. Duham は主張する(vgl. C. H. Cornill 46)。だが、5節以下の2人称の語り掛け、5節以下の命令形の2人称の語尾に鑑み、6節 b もヤハウェの語りと見なすべきである。従って、T. Odashima (Untersuchungen, 178-180) や R. Liwak (Prophet, 215) のように、文体的変更を根拠にこの6節 b を後代の補遺と見なす必要はない。ヤハウェが3人称で語られているのは(「ヤハウェの怒り」8節 b), 話者の交代に基づくものであり、8節 b は、ある「民の嘆き」Volksklage の引用である。
- (8) 獅子の描写に関して; vgl. エレ 2, 15: 破壊者の表象について; vgl. エレ 22, 7.
- (9) R. Liwak (Prophet, 217) は8節 b を後代の付加と見る。というのは、8節 b が余計だからである。それに対して W. L. Holladay (Jeremiah I, 154) は、正当に判断し、8節

- bは8節aの続きであり、導入の接続詞 **וְ** を理由ではなく、強調の意味(「まさに」)であると理解している。
- (10) マソラ本文(MT)によれば、語っているのは預言者である。すると、10 節はエレミヤの「一人称による嘆き」Ich-Klageである。確かに預言者は別の箇所では審判預言が実現しないことを嘆く(vgl. エレ 15,18;17,15ff)。だが、エレミヤは彼の救済預言が成就しなかった、その失望を言い表すような箇所は他にはない。それゆえ、マソラ本文は意味を成さないと見なすべきであり、**וְאֵלֶיךָ** に関する本文損傷の原因は恐らくはエレ 14,13 からの引用にあると考えられる(W. Rudolph 34)。70 人訳聖書(LXX)は正当にも「彼ら」(= 預言者たち) を文頭においている(vgl. B. Duhm 49f; C.H. Cornill 48; F. Giesebrecht 25; J. Schreiner, Jeremia I, 35)。
- (11) Vgl. R. Liwak, Prophet, 224f; vgl. G. Wanke (Jeremia I, 60f) は 9 - 10 節を全て申命記史家による編集と見る。また、11 - 12 節を後代の挿入とし、5 - 8 節は13節に直接続くとする。
- (12) 11 - 18 節をエレミヤのもとと見なす立場; vgl. B. Duhm (43, 11 節a除いて) J. Bright (35) J.A. Thompson (224) W. McKane (Jeremia I, 96) G. Wanke, Jeremia I, 62 (但し 17b 除く)。
- (13) B. Duhm 50; P. Volz 149 Anm.2; W. McKane 96, R. Liwak, Prophet, 225.
- (14) J. Schreiner, Jeremia I, 36.
- (15) B. Duhm (51) によれば、14 節は後代の付加である;
vgl. R.P. Carroll 164; W. Werner, Jeremia I, 74。
- (16) Vgl. 詩 6,4; 74,10; 79, 5; 80,5; 90,13; 94,3; vgl. イザ 6,11; エレ 4,21; 12,4; 23,26; ダニ 12,6; 8,13; 更に民 14,26 (神の嘆きとして)。この問いは神への語り掛けと願いと密接に結び付いており、ひとつの祈りの構成要素と考えられる。
- (17) Vgl. サム上 1,12; 箴 1,22; 6,9; これらの箇所では勧告と嘆きの順序はエレミヤ書 4 章とはさかさまである。また、ホセ 8,5 とエレ 4,14b は上記の箇所とは異なって、民全体に向けている。但し、この語法はエレ 31,21 - 22 にも出てくる。この箇所の真正性に関しては目下論争されている。だが、恐らく後代の付加と考えられる(vgl. B. Duhm 250f; F. Giesebrecht 169f)。
- (18) マソラの母音付けは「彼が投げ出した」は、神の語りとしては適さない。そこで H.W. Wolff (BK XV / 1. 169f) と共に、ギリシア語訳の読み方(命令形) を本来の本文として採用する。1 人称への読み替え(vgl. T. H. Robinson, HAT 14,32) は、支持し得ない。同様に、vgl. Rudolph (KAT XI II / 1,157) 不定詞に読む。
- (19) G. Warmuth, Mahnwort, 121. もっとも少なからずの研究者、注解者たちはここで預言者が民の救済の希望を尚も捨てておらず、従ってエレ 4,14 を「最後の警告」 letzte Warnung と理解している(既に F. Giesebrecht 26; P. Volz 55; W. L. Holaday, Jeremia I, 157; C. Hardmeier, WuD 21, 23f; vgl. G. Wanke, Jeremia I, 62; vgl. J.R. Lundbom, Jeremia I, 357)。彼らはその「勧告の言葉」 Mahnwort が実際に何らかの心の刷新を迫るような現実的な要求として理解している。しかしながら、勧告を語りながら同時に 4 章 18 節のように既に包括的な判決が下されていることが十分にされていない。むしろ、そのような文節に意味があるとすれば、その勧告が「罪の立証」 Schuld aufweis として機能する場合ではないだろうか。
- (20) 創 12,13 に同じような様式が見られる。だが、それは丁寧な祈願である。最古の例証は創 27,25 である(J; vgl. C. Westermann, BK I / 2, 530) 父であるイサクは息子ヤコブに鹿の肉を持ってくるように勧告した。それは彼の息子を祝福するためであった。この

語法は恐らく家族の中で育まれたのであろう(vgl. 出20,12;申5,16)。また、とりわけ教育的な知恵の中で用いられた。「忠告を聞きなさい、教えに従いなさい、そうすれば将来彼は賢人になれるだろう」(箴 19,20)。申命記ではこの語法は説教の中に採用され、やはり教育的機能を有したと考えられる(申 4,1;12,19; vgl. ヨシ 4,5f)。

- (21) 「この恵みは明らかにただ『残りの者』だけ、しかも『多分』与えられるだろう」(W.H. Schmidt, Altitl. Glaube, 289)ders.Zukunftsgeweiheit,40ff.
- (22) B. Duhm (53) と F. Giesebrecht (28) は 22 節を後代の補遺と見なす(最近では、R.P. Carroll 167 ; G.Wanke,Jeremia I ,63 ; vgl. W.Werner,Jeremia I 76)。だが、彼らの論拠となる22節以下の話者の交代は必ずしも文脈上の亀裂によるものとは限らない。それどころか、審判の理由付けは 17 節 b と 18 節にも記されている。また、22 節「愚かな」(סכר) という言葉は他にはエレミヤに遡ると思われる 5 章 21 節にも用いられている。そこではその語は同様に民全体に向けられて用いられている。また、ヤハウェ認識の欠如に関する非難はエレミヤの審判宣教の主題のひとつでもある(エレ 2,8 ; 9,2.5; 22,16)。
- (23) 「空を飛ぶもの」という表象に関しては; vgl. 創 1, 26 (P)。
- (24) この箇所真正性を主張するのは、B.Duhm (53) ,W.Rudolph (35) ,A.Weiser(40f) ,J.Bright(34) , J. A. Thompson (229f) , W. L. Holladay (Jeremiah I, 164) である; 他方 , F.Giesebrecht (28) ,P. Volz (50f) ,J. P.Hyatt (841) , R. P. Carroll (168) そして最近では R.Albertz (ZAW94,39 Anm.4.62) ,G.Wanke (Jeremia I,64) ,W.Werner (Jeremia I, 77) が反対の立場である。
- (25) 私訳部分参照。マソラ本文(MT)によれば、27 節 b には否定詞が記されている。が、これは明らかに現在の文脈と適合しない(特に 28 節 b と)。これは後代になって絶滅の審判預言を緩和するために加筆修正されたと考えられる(vgl. エレ 5,10)。本文変更に関しては、BHS 脚注を参照せよ;vgl.W. Rudolph 36.
- (26) Vgl. J. Schreiner, Jeremia I. 34.
- (27) 2 つの動詞, כָּבַד (14 節) と נָגַד (18 節) とは伝承史上の連関がある。
後者の用例として、前置詞 לְ を伴って(18 節 b), 空間的な支配権の拡大(イザ 16,8; エレ 48,32), 軍事的攻撃を表す(ミカ 1,9; vgl. エレ 4, 10)。また、不浄となった物との接触を表すこともある(レビ 1,10; 不浄な人物との接触;レビ 15,7,18;死者との接触;民 19,11.13.16.18; 31,19;王下13,21等)尚、2つの動詞の基本用例について詳細なことにしまして;vgl.M.Delcor,THAT II,37-39; L. Schwienhorst, ThWAT V, 219-226;G.André,ThWAT IV. 42-45.
また、祭儀的領域においては浄化には水が必要である。上記の 2 つの動詞はしばしば共に古い祭儀伝承やレビ的律法の中に見られる(出19,10, 12-14 J vgl. M. Noth,A TD 5,127; レビ11,24-28.39 - 40. vgl.M.Noth,A TD 6,76.80(但し , 39 - 40 節を除いて; K.Elliger,HAT 4,149 (但し ,22 節 b ,39-40 節を除いて) 更に W. Kornfeld, Levitikus 43-47;vgl. レビ 15,5 - 8.10-13.17.19.21f.27;vgl.M.Noth,A TD6,97;K.Elliger,HAT4,196; W.Kornfeld,Levitikus 59;民 19,10f. 18f.21f;vgl. M.Noth,A TD 7,123.125)。
従って、預言者エレミヤは自分の審判宣教にこの古い伝承を採用して転用したと考えられる(vgl. エレ 2,22;詩 51,4.9)。
- (28) Vgl. N. Ittmann, Konfessionen, 23.
- (29) Vgl. G. Warmuth. Mahnwort,103.
- (30) 「無割礼の心」という表象に関して; エレ 9,25;エゼ 44,7,9;vgl. レビ26,41. 申30,6には、心の割礼がヤハウェの賜物として付与されることが期待されている;Vgl. エレ 31,31 - 34

(dtr)

- (31) G. Mayer, ThWAT 385.
 - (32) Vgl. H.W. Wolff, Anthropologie, 88.
 - (33) Vgl. H. -J. Hermisson, Sprache und Ritus,74.
 - (34) Vgl. B. Otzen, ThWAT I, 24; H. -J. Fabry, ThWAT IV, 438.
 - (35) Vgl. KBL3 ,3.
 - (36) Vgl. 箴 26, 23.
 - (37) 本文翻訳に関しては; vgl. O. Plöger ,BK XVII, 146.
 - (38) C. Westermann(BK I /1,551f); רעה は人間のひとつの状態を表現している。つまり、人間の行為とその意志とが別々ではなく、人間全体が罪の下に見られている。
 - (39) מַחֲשָׁבָה vgl. KBL³, 542.
 - (40) この用語の基本的な意味領域について; vgl. KBL3 , 1059.
 - (41) 詩 64,7 において「心(קֶרֶב)は救い難い, 心(לֵב)は深い」と言われている。ここでは敵の企てた陰謀が考えられる。Vgl. H. J. Kraus, BK IV/2, 605(本文に関して) 607.
 - (42) Vgl. エレ 5,23,更に申命記史家は「強情な心」に関するステレオタイプな定式を用いる; エレ 7,24;11,8;16,12;18,12,23,17(以上全て dtr) vgl. エレ 3,17 (postdtr) .
 - (43) Vgl- G. André ThWAT IV, 42.
 - (44) 動詞 נָנַע の主語が欠落している。BHSを見よ。
 - (45) Vgl. T. Polk (Persona 52) は,「このあなたの苦い悪があなたの心に達している」と訳出している。
 - (46) BHSを見よ。
 - (47) KBL³ (576) によると,מַעֲרָה, は,主に(1) はらわた, 内臓,(2) 人間が生きる座としてのからだ,(3) 内なるもの(感情の座),(4) 腹部を意味する。Vgl. H.W. Wolff, Anthropologie, 102.
 - (48) Vgl. H.Ringgren, ThWAT IV, 1037f; J. Schreiner 37.
 - (49) Vgl.M.Ogushi, in “Was ist der Mensch....?” (FS H. W. Wolff) ,45.
 - (50) 翻訳に関して; vgl.H. Wildberger (BK X/2, 590) vgl. エレ 48,36 (2 回「心」が用いられている) .
 - (51) Vgl. KBL³,240.旧約聖書は לב に関する医学的あるいは生物学的な情報をわずかにしか,あるいはごく例外的にしか報じていない(例, 王下 9,20; サム下 18,14 等)。「心臓の壁」という表象(エレ 4,19) は, H.W.Wolff (Anthropologie,71) によれば,「心のう」を指し示す。そして「心の激震」によって,つまり激痛が圧迫感か,エレミヤを狭心症のような発作が実際に襲ったのではないかと,H.W.Wolff は理解する。原因は,北からの敵の接近に対する不安である(vgl.H.-J. Fabry. ThWAT IV, 424)。他方, T.Polk は「心」という語はエレミヤの自己あるいは実存を表すメタファーに過ぎず, H.W.Wolff の見解を否定し, また「心」(לֵב) の感情としての座について, H.W.Wolff の説明では不十分であると批判した(Persona, 33)。エレ 4,19 に関して, T.Polk の主張の重点は,エレミヤは病気などの身体的な状況に関してではなく,ただ預言者の感情的側面だけを描いているという点にある(Persona, 53-55)。
- だが,このようなT.Polkの批判はあまりにも一方的のように思える。結局,彼は「心臓の壁」「はらわた」について説明していない。確かに,彼が旧約聖書の人間論の特徴として,正当にも「人間の心理と肉体との統一性は決して分離されない」と言い表しているにもかかわらず(Persona, 44),エレ 4,19 では心理的側面だけを強調するならば,「心」に関するT.Polkの主張はそもそも矛盾に満ちてはいないだろうか。実に,短

い箇所でありながら、エレ4,19には「心」だけではなく、「はらわた」など種々の人間論用語が用いられている。確かにエレミヤが病気であったか否かを判断する証拠は少なく、確実なことは言い難い。だが、不安や恐れの中で、痛みに似た苦悩の中に、身も心も分離し得ない「人間」として、神の審判の直下にいる預言者であり、同時に人間エレミヤの実存の姿を生き生きと描き出すのにこれらの人間論用語は貢献していることは、少なくとも明らかではないだろうか。